白楽天の卯酒の詩と平安朝漢詩

丹羽博之

中唐の詩人白楽天は陶淵明、李白と並ぶ飲酒詩人と称される。自らを「酔吟先生」「酒狂」と呼び、七五年の生涯に残された二千八百余首の詩中には実に多くの酒が登場する。その詩文集『白氏文集』は平安朝文学に多大の影響を与えていることは周知のことであるが、その特徴の一つである飲酒を詠んだ詩も当然平安文学にさまざまの影を落としていると考えられる。今回その中で気づいた卯酒の詩について考察する。

一

初めて卯酒の詩に気づいたのは次の詩からであった。

田家　大蔵卿藤原有家

卯飲囿中桑葉露　囿中に卯飲す　桑葉の露

西収郭外稲花雲　郭外に西収す　稲花の雲

この詩の「卯酒」という珍しい詩語について用例を求めたところ、白楽天の

［『和漢兼作集』巻七］

卯飲

短屏風掩臥牀頭　短屏風は掩ふ臥牀の頭
烏帽青氈白氎裘　烏帽青氈　白氎裘
卯飲一盃眠一覚　卯飲一盃　眠り一たび覚む
世間何事不悠悠　世間何事か　悠悠たらざらん

［巻六九・3568　会昌一（八四一）年七一歳、洛陽（白氏文集の本文は那波道円活字本による。詩番号、年齢推定は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』による。）］

の例を得た。『白氏文集』には、さらに

橋亭卯酒　橋亭卯飲
卯時偶飲齋時臥　卯時に偶飲して　齋時に臥す
林下高橋橋上亭　林下の高橋　橋上の亭
松影過窓眠始覚　松影窓を過ぎて　眠り始めて覚め
竹風吹面醉初醒　竹風面を吹きて　醉ひ初めて醒む
就荷葉上包魚酢　荷葉の上に就きて　魚酢を包み
當石渠中浸酒瓶　石渠の中に当りて　酒瓶を浸す
生計悠悠身兀兀　生計は悠悠たり　身は兀兀たり
甘從妻喚作劉伶　甘んじて妻の劉伶と喚び作すに従ふ

［巻五八・2842　太和四（八三〇）年五九歳、洛陽］

の例を見る。この「卯飲」というのは文字通り卯の刻（午前六時）から飲む酒のことである。彼の卯酒については、青木正児氏が「白楽天の朝酒の詩」（『青木正児全集』巻七）において、すでに触れられており、「楽天以前にも以後にも彼ほど卯酒を詠じたものは無いので、彼は

其の開祖と謂つてよからう。」と述べられている。たしかに、白楽天以前には詩の中に「卯酒」「卯飲」の例は見つけがたく、白楽天によって詩に詠まれ始めたようである。この「卯酒」に関する詩は、白詩中に、実に十二例も見られ、如何に彼がこの「卯酒」を愛飲していたかが容易に察せられる。以下に年代順に列挙してみる。

薔薇正開春酒初熟。因招劉十九張大夫崔二十四同飲　薔薇正に開き春酒初めて熟す。因りて劉十九、張大夫、崔二十四を招き、同に飲む。

甕頭竹葉経春熟　甕頭の竹葉　春を経て熟し
階底薔薇入夏開　階底の薔薇　夏に入りて開く
似火浅深紅壓架　火に似て浅深　紅架を圧し
如餳気味緑粘臺　餳の如き気味　緑台に粘ず
試将詩句相招去　試みに詩句を将て　相招去せん
儻有風情或可来　儻し風情有らば　或いは来たるべし
明日早花應更好　明日早花　応に更に好かるべし
心期同醉卯時盃　心に期す同に卯時の盃に醉はんことを

［巻十七・1055 元和一三（八一八）年四七歳、江州］

年代的に初めて卯酒が詠まれたこの詩は、白楽天が官途において最初の挫折を味わった江州司馬の時に詠まれたものである。内容的にも身は左遷されて地方官としての閑の中にあって、花を愛でながら新しく漉された春酒で、朝から気の合う仲間を前以て誘っておいて一杯やろうというのどかなものである。左遷の憂き身を慰める手段であるとともに白楽天の閑適の境地を詠む素材の一つとして、卯酒は謳われている。この詩の首聯は日本人にも好まれ、

甕頭竹葉経春熟　階底薔薇入夏開（『千載佳句』上、首夏『和漢朗詠集』上、首夏）

はしのもとのさうび、けしきばかりさきて春秋の花ざかりよりもしめやかにをかしき程なるに、うちとけ遊び給ふ

甕のほとりの竹葉も末の世遥かに見え、階の下の薔薇も夏を待ち顔になどして、さまざまめでたきに　（『栄華物語』つぼみ花）

中納言、まかで見給ふとて階のもとのさうびとうち誦じ給へるを若き人々は飽かず慕ひぬべくめで聞ゆ　（『堤中納言物語』逢坂こえぬ権中納言）

（『源氏物語』賢木）

等が平安文学に受容されている。ところが、内容的には、身は閑で季節も最高、おまけにほどよく熟した酒まである、いざ友と朝酒を酌み交わさんというのが、白詩の趣旨であると思われるが、平安人はそのこととはかかわりのない部分、それは首聯のような自然描写の部分に共感を覚え、『千載佳句』『和漢朗詠集』に取り入れ、愛唱している。『源氏物語』『栄華物語』などの和文も同じ受容のされ方である。たしかに首聯も対句としてもすぐれているがいささか断章主義的な鑑賞の仕方という感がする。すでに指摘されていることではあるが、平安人は白楽天の心情を真に汲んでその核心部を理解し、享受しようとするのではなく、一首の詩の主題を味わうというよりもそれとはあまり関係のない部分の自然描写、花鳥風月的世界の詩語や表現を平安人の美の対象として享受している。白詩の失意の憂さを卯酒によっていやそうという彼の心境の理解は、すくなくとも享受という形ではなされていない。

なお、この詩の頸聯も『千載佳句』（巻上・人事・招客）に収められているが本詩の主題をとらえている。

與諸客空腹飲　諸客と空腹に飲す

隔宿書招客　宿を隔てて　書もて客を招き
平明飲暖寒　平明　飲みて寒を暖む
麴神寅日合　麴神　寅日に合ひ
酒聖卯時歓　酒聖　卯時に歓す
促膝纔飛白　促膝　纔かに飛白
酡顔已渥丹　酡顔　已に渥丹
碧籌攢米椀　碧籌　米椀に攢め

紅袖拂骰盤　紅袖　骰盤を拂う
醉後歌尤異　醉後　歌尤も異なり
狂来舞可難　狂来　舞難かるべし
抛盃語同坐　盃を抛ち語りて同に坐す
莫作老人看　老人の看を作すこと莫れ

［巻二十・1347 長慶二（八二二）年五一歳、杭州］

次に卯酒が詠まれるのは、四年後の杭州刺使の時である。「宿を隔てて書もて客を招く」とあるから、前詩と同様ごていねいにも前日から招待状を出しておいて、空腹のままで朝酒を楽しみ暖を取ろうというのである。まことに念の入った楽しみ方であるが、杭州の長として誰はばかることの無い楽しみ方といえよう。それまでの都長安おける中央官僚の中でも要職の中書舎人としての緊張から解放された喜びさえ伝わってくる詩である。白楽天は地方官としてもまじめに職務に精励しており、たまの休日の朝、杭州刺使としての日々の激務からの解放感と地方の長としての気安さから客を招いて朝酒を飲もうという心境になったのであろうか。後述するがそれを裏付けるかのように、都長安において中央官僚であった時には卯酒の詩は残っていない。

卯時酒　卯時の酒
佛法讃醍醐　仏法は　醍醐を讃し
仙方誇沆瀣　仙方は沆瀣を誇る
未如卯時酒　未だ如かず　卯時の酒
神速功力倍　神速にして　功力の倍するに
一杯置掌上　一杯　掌上に置き
三嚥入腹内　三たび嚥みて　腹内に入る
煦若春貫腸　煦かなること春の腸を貫くが若し

喧如日炙背　喧として日の背を炙るが如し
豈独支體暢　豈に独り支体の暢ぶるのみならんや
仍加志気大　仍ほ加す　志気大なり
當時遺形骸　当時　形骸を遺れ
竟日忘冠帯　竟日　冠帯を忘れ
以遊華胥国　華胥の国に遊ぶに似たり
疑反混元代　混元の代に反るかと疑ふ
一性既完全　一性　既に完全
萬機皆破碎　万機　皆破碎す
半醒思往来　半ば醒めて　思ひ往来す
往来吁可恠　往来　吁恠む可し
寵辱憂喜間　寵辱は　憂喜の間
惶惶二十載　惶惶たる　こと二十載
前年辞紫闥　前年　紫闥を辞し
今歳抛皂蓋　今歳　皂蓋を抛つ
去矣魚反泉　去て　魚泉に反り
超然蟬離蛻　超熱として　蟬蛻を離る
是非莫分別　是非も　分別すること莫く
行止無疑礙　行止も　疑礙無し
浩気貯胸中　浩気を　胸中に貯へ

青雲委身外　青雲を　身外に委つ
捫心私自語　心を捫して　私に自ら語る
自語誰能會　自ら語るも　誰か能く会せん
五十年来心　五十年来の心
未如今日泰　未だ今日の泰きに如かず
況茲杯中物　況んや茲の杯中の物
行坐長相對　行坐長く相対するをや

［巻五一・2223 宝暦二（八二六）年五五歳、蘇州］

蘇州刺使を病気と称し、任期半ばで解任され、蘇州を離れるころの作である。「前年紫闥（宮廷）を辞し、今歳皂蓋（刺使）を抛つ、去て魚泉に反り、超然として蟬蛻を離る」の詩句からは、中央の官から逃れ、更に今年は刺使の乗る皂蓋の馬車も捨て自由になったあふれんばかりの喜びがうかがわれる。先の江州、杭州の時の詩と同じく閑適の境地が彼に卯酒の詩を詠ませており、朝酒の楽しみを借りて己の喜びを詠んでいる。杭州よりも蘇州は繁華な州で規模も大きく、職務も多かったであろうし、この時期健康も害しており、おまけに落馬による傷も負ったりで己が名にふさわしい「居易」「楽天」の境遇を求めて行こうとする姿勢がうかがわれる。

和嘗新酒　新酒を嘗むるに和す

空腹嘗新酒　空腹にして　新酒を嘗め
偶成卯時醉　偶ま卯時の醉を成す
醉来擁褐裘　醉ひ来りて　褐裘を擁し
直至齋時睡　直ちに斎時に至りて睡る
静酣不語笑　静酣は　語笑せず
真寝無夢寐　真寝は　夢寐無し

殆欲忘形骸　殆ど形骸を忘れんと欲す
詎知属天地　詎ぞ天地に属するを知らん
醒餘和未散　醒餘　和未だ散ぜず
起坐澹無事　起坐して　澹として事無し
挙臂一欠伸　臂を挙げて　一たび欠伸し
引琴彈秋思　琴を引きて　秋思を弾ず

［巻五二・2271　太和三（八二九）年五八歳、洛陽］

この詩は、太和三年春病により免官、太子賓客として洛陽にいたころの作と考えられる。朋党の争いなど権力闘争のちまた長安から距離をおいた地での作である。「醉来擁褐裘、直至齋時睡」の詩句から、朝酒を飲んで昼までぐっすり眠るという正に閑適の境遇がうかがわれ、その様子が楽しげに且つ誇らしげに詠まれている。

嘗黄醅新酎憶微之　黄醅の新酎を嘗めて微之を憶ふ

世間好物黄醅酒　世間の好物　黄醅の酒
天上閑人白侍郎　天上の閑人　白侍郎
愛向卯時謀洽樂　愛して卯時に向つて洽楽を謀る
亦曾酉日放龕狂　亦た曾て酉日龕狂を放にす
醉来枕麴貧如富　醉来麴を枕にすれば貧も富めるが如く
身後堆金有若亡　身後金を堆するは有れど亡きが若し
元九計程殊未到　元九程を計るに殊に未だ到らず
甕頭一盞共誰嘗　甕頭の一盞誰と共に嘗めん

［巻五八・2816　太和三（八二九）年五八歳、洛陽］

自らを「閑人」と呼び、暇にまかせて思うがまま自由に朝から酔うことのできる境遇の無上の喜びを述べる。その一方で六十を目前にして、老境に入ったことを意識して来たか「身後堆金有若亡」と詠み、残り少ない人生をせめて長年の親友とうまい朝酒を酌み交わしたいと願う。年代順でいえば、前掲の「橋亭卯飲」の詩がここに入るが、この詩も「生計悠悠身兀兀」と朝酒を橋亭で飲んでまた眠るというまことにのどかなものである。

早飲醉中除河南尹敕到　早飲醉中河南尹に除せらるる敕到る

雪擁衡門水満池　雪は衡門を擁して　水は池に満ち
温爐卯後湲寒時　温爐卯後　寒を湲むる時
緑醅新酎嘗初醉　緑醅新酎　嘗めて初めて醉ひ
黄紙除書到不知　黄紙の除書　到るも知らず
厚俸自来誠忝濫　厚俸　自ら来りて　誠に忝濫
老身欲起尚遅疑　老身起たんと欲して　尚ほ遅疑す
應須了却丘中計　応に須からく了却すべし丘中の計
女嫁男婚三逕資　女嫁し男婚す　三逕の資

［巻五八・2872　太和四（八三〇）年五九歳、洛陽］

のん気に朝酒を飲んで酔っていると河南の尹に任命する敕の「黄紙の除書」が届いたのも知らなかったというおどけた詩であり、彼の人間らしい性格さえ伝わってこよう。この詩では、身は六十近い老人であり、いまさら新たな職に就くのもためらうと言い、もうかっての身は諫官として諷諭詩を詠んだころの少壮気鋭の新進官僚の面影は無い。

府西池北新葺水齋。即事招賓。偶題十六韻　府西池の北、新たに水齋を葺く。事に即きて賓を招く。偶ま十六韻を題す。

繚繞府西面　繚繞たり　府西の面
潺湲池北頭　潺湲たり　池北の頭

鑿開明月峽　明月　峽を鑿開し
決破白蘋州　白蘋　州を決破す
清淺漪瀾急　清浅　漪瀾急に
寅緣浦嶼幽　寅縁して　浦嶼幽なり
直衝行徑斷　直ちに行徑衝きて断ち
平入臥齋流　平かに臥齋入つて流る
石疊青稜玉　石は青稜の玉を疊み
波翻白片鷗　波は白片の鷗を翻す
噴時千點雨　噴く時は　千点の雨
澄處一泓油　澄む処は　一泓の油
絶境應難別　絶境　応に別れ難く
同心豈易求　同心豈に求め易からんや
少逢人愛翫　人の愛翫するに逢ふこと少なく
多是我淹留　多くは是れ　我淹留す
夾岸鋪長簟　岸を夾んで　長簟を鋪き
當軒泊小舟　軒に当つて　小舟を泊す
枕前看鶴浴　枕前　鶴の浴するを看
牀下見魚遊　牀下　魚の遊ぶを見る
洞戸斜開扇　洞戸　斜めに扇を開く
疎簾半上鈎　疎簾　半ば鈎に上る

紫浮萍泛泛　紫浮んで　萍泛泛たり
碧亞竹修修　碧亞れて　竹修修たり
讀罷書仍展　読み罷んで　書仍ほ展べ
碁終局未収　碁終りて　局未だ収めず
午茶能散睡　午茶　能く睡を散じ
卯酒善消愁　卯酒　善く愁を消す
簷雨晚初霽　簷雨　晚に初めて霽れ
窓風涼欲休　窓風　涼しく休まんと欲せしむ
誰能伴老尹　誰か能く　老尹に伴ひ
時復一閑遊　時に復た　一たび閑遊せん

［巻・2879　太和五（八三一）年六〇歳、洛陽］

水斎（水亭）での楽しみの一つとして、そこでの卯酒の効能が「卯酒善消愁」と詠まれており、これもわが身の閑を喜びをもって詠まれている。

醉吟　　醉吟

醉来忘渇復忘飢　醉来りて渇を忘れ　復た飢を忘れ
冠帯形骸杳若遺　冠帯形骸　杳として遺るるが若し
耳底齋鐘初過後　耳底斎鐘　初めて過ぐる後
心頭卯酒未消時　心頭卯酒　未だ消えざる時
臨風朗詠從人聽　風に臨んで　朗詠して人の聴くに従せ
看雪閑行任馬遅　雪を看て　閑行して馬の遅きに任す

応被衆疑公事慢　応に衆に公事の慢なるを疑はるべし
承前府尹不吟詩　承前の府尹　詩を吟ぜず

［巻五八・2895 太和六（八三二）年六一歳、洛陽］

「応被衆疑公事慢」と仕事がたまってもおかまいなしに、呑気に朝酒を飲み、雪見をしながら吟行する。それを誇るかのごとき印象さえ感じられる。当時としての老境に入り、残り少ない人生、せめて心のどこかに酔ったときぐらいは仕事も放っておいて楽しもうという姿勢がうかがえる。しかし、彼は日々の職務においては

心中為念農桑苦　心中　農桑の苦を念ふが為に
耳裏如聞飢凍声　耳裏　飢凍の声を聞くが如し

［巻五八・2893「新製綾襖成、感而有レ詠」］

等と農民の辛苦を思いやり、良吏たらんと励んでいる。このときの卯酒はまさしく、忙中の閑の詠であろう。彼の詩にはこうした二面性というか複雑な面も顔をのぞかせている。心情としては若き日々のように経世済民を志したいと思い続け、貧しい農民たちのことも気にはなっていただろう。ところが半生の官途で味わった如何ともしがたい現実の厚い壁や長安で繰り返される醜い争い、肉親や友人の相次ぐ死、我が身に迫りくる老いと病、こうした諸々が彼の心を弱気にさせ、これらの苦悩から脱する一つの手段として、朝酒や詠詩の世界へ逃避していったという面もあろう。朝から酔い、雪見をしながら馬の歩みにまかせて吟行するという何とものどかな詩ではある。朝酒を酌み、充足した世界に浸りながらもふとした折りに彼の胸中をよぎるものは安逸をむさぼる己への負い目もあったのではないか。満ち足りた世界に安住しているように謳いながらも何か韜晦めいたものをふと感じてしまうのである。

藍田劉明府攜酌相過。與皇甫郎中卯時同飲。醉後贈之　藍田の劉明府酌を攜へて相過る。皇甫郎中と卯時に同に飲み、醉後に之に贈る。

臘月九日煖寒客　臘月九日　煖寒の客
卯時十分空腹杯　卯時十分なり　空腹の杯

玄晏舞狂烏帽落　玄晏舞狂して　烏帽落ち
藍田醉倒玉山頽　藍田醉倒して　玉山頽る
貌偸花色老塹去　貌は花色を偸みて　老塹く去り
歌踏柳枝春暗来　歌は柳枝を踏みて　春暗来る
不為劉家賢聖物　劉家賢聖の物の為ならざれば
愁翁笑口大難開　愁翁の笑口　大いに開き難し

［巻六四・3107 太和七（八三三）年六二歳、洛陽］

老友人達と寒を暖めながら朝酒を空腹の時に飲む無上の楽しみを友人に送った詩である。この年の四月には任満ち、河南尹を辞している。職にある時は誠実に職務を励もうとした白楽天ではあるが閑職にもどるとまた遊び心が湧くということであろうか。残り少ないと思われる人生、官位も棒銭も満足すべきものであった彼にとっては、友人と朝から酒を飲み歓楽を尽くすことが一つの生き方であったようである。それは、古詩以来の飲酒詩のモチーフであったが、まさにそれを実践できた数少ない幸運な詩人の一人といえよう。

閑樂　　閑楽

坐安臥穏輿平肩　坐すること安く臥すこと穏やかにして　輿は肩に平かなり
倚杖被衫遶四邊　杖に倚り衫を被て　四辺を遶る
空腹三盃卯後酒　空腹三盃　卯後の酒
曲肱一覺醉中眠　曲肱一覺　醉中の眠
更無忙苦吟閑樂　更に忙苦無くして閑楽を吟ず
恐是人間自在天　恐らくは是れ人間の自在天

［巻六八・3507 会昌二（八四二）年七一歳、洛陽］

詩題の如く、全編「閑楽」の境地を謳う。ここでうたうように、彼にとっては歓楽の重要な要素の一つが卯酒であった。

卯酒の詩が最後に詠まれたのは一番最初に挙げた「卯飲」の詩である。詩題の通り、卯飲の様子と喜びを述べている。時に白楽天七一歳。彼は七十歳の冬には病の故に百日の休暇を請うており、七一歳の春には刑部尚書をもって致仕する。その前後のまことにのどかな悠々自適の境遇を彼らしい飾り気のない表現で淡々と詠む。

以上白詩の中の「卯酒」の詩を見て来たが、朝酒の楽しみを、酒本来の美味さ、友人との交歓、暖を取るなどとのべながら、全体を通して感じられることは、朝酒を飲むことのできる境遇を誇らかに謳っていることである。それは朝酒が飲める経済的ゆとりからの喜びではなく、朝廷に出仕しなくてもよい閑適の喜びである。

白詩に見える症状から彼は糖尿病を患っていた可能性を指摘したことがある（「白楽天の病状」大手前女子大学文学部論集二五号・九一年十二月）。浅酌とはいえ朝からカロリーの高いアルコールを飲んでいたならば糖尿病を患い、症状も悪化して行ったのではないか。

二

次に卯酒が詠まれた白詩以外の例を見ていく。卯酒が詠まれた詩は青木正児氏が述べられたように、白詩以前には用例は見いだしがたいものの、わずかに次の例が認められる。

上皇登二沈香亭一、詔二太真妃一。妃子時卯酔未レ醒、命二高力士一従二侍児一扶掖而至。妃子酔顔残粧、鬢乱釵横、不レ能二再拝一。上皇笑曰豈是妃子酔、真海棠睡未レ足耳。（『太真外傳』）

盛唐の例であるが、卯刻から酒を飲む習慣は白楽天以前からも行われていたようである。前掲の白詩にも友と飲む例が数例あったことからも明らかである。ただし、卯刻より酒を飲むといった、見方によっては不謹慎なふざけたようなことがら、身辺雑記を詠詩の対象としたのは白楽天がはじめてであり、白詩の特徴でもあり、中唐から晩唐、宋詩にかけての詩風の先取りと言えよう。

次に白詩以後の例として気づいたものを挙げる。白楽天を慕った北宋の蘇軾には数例見える。

卯酒困三杯　卯酒　三杯に困（くる）しみ

午餐便一肉　午餐　便ち一肉
雨聲来不断　雨声　来りて断へず
睡味清且熟　睡味　清くして且つ熟す
（以下略）

［『蘇東坡詩集』巻二十「二月二十六日。雨中熟睡、至レ晩強起出レ門。還作二此詩一。意志殊昏也」］

この詩の一、二句は、前掲の白詩の「空腹三杯卯後酒、曲肱一覚酔中眠」や同じく白詩の「午餐何所レ有、魚肉一両味」（「夏日閑放」巻六九・3517）などから想を得ているようである。終日の雨の徒然に、朝から酒を飲んで、熟睡し寝覚めて詩を賦したというもので、白楽天の卯酒の詩の境地に近い。

三杯卯困忘家事　三杯卯に困み　家事を忘れ
萬戸春濃感国恩　万戸春濃かにして　国恩に感ず

［同巻三十八「惠守詹君見レ和復次韻」］

これらの詩の「三杯」も前掲の白詩によるものであろう。

卯酒無虚日　卯酒　虚日無く
夜碁有達晨　夜碁　晨に達する有り

［同巻四十二「和下陶與二殷晉安一別上。送二昌化軍使張中一」］

気の合う友人と毎日卯酒を酌み交わし、夜明けに至るまで碁を闘わせあった日々を回顧しての作である。

白楽天がこよなく愛した杭州に蘇東坡も熙寧四（一〇七二）年、三六歳の時に通判事（副知事）として赴任しており、更に五四歳の時には知事として着任している。特に五四歳の時の赴任は自ら望んで中央官僚から地方官に遷っており、白が五一歳の時に中書舎人から望んで杭州刺使として下った事情と年齢も酷似している。白も蘇も西湖の管理に心を砕き後世に残る治水事業を残している。『白氏文集』の「銭唐湖（西湖のこと）石記」には自分の治水事業に強い自信を持っていたことがうかがわれるし、蘇が築いた堤防は「蘇堤春暁」として残り、観光

名所としても今も名高い。両詩人には西湖を詠じた名詩も数多く、共通する事柄が多い。蘇東坡は任満ちて去るにあたり、

予去レ杭、十六年而復来。留三年而去。平日自覺出處老少麗似二楽天一。雖二才名相遠一、而安分寡求亦庶幾焉。（以下略）　［巻三三］

と題する絶句三首連作を詠んでいる。その二首目では

出処依稀似楽天　出処は依稀　楽天に似たり
敢将衰老較前賢　敢へて衰老将て　前賢に較せんや

と詠む。このように白の人柄や人生に心を寄せていた蘇[注1]は白が杭州でも詠んだ卯酒の詩にも心を留め、自己の詩にもしばしば詠じたのであろう。このほか、南宋の陸游の詩にも数例認められる。

日高未泫晨霜白　日高きも未だ泫ず　晨霜の白
風勁先消卯酒紅　風勁く先づ消す　卯酒の紅

［『劒南詩稿』巻十三「早行」（陸游の卯酒の用例は、小田美和子氏より御教示を得た）］

「日高」も有名な「日高眠足猶慵起」の詩句をはじめ、白詩に数多見られ、卯酒の語とともに白詩を学んだものであろう。ただし、この詩は「早行」の情景を述べた詩で、卯酒はその一景物にすぎない。このほかにも

天寒朝泥酒　天寒く　朝より泥酒し
熟睡臥蓬窗　熟睡　蓬窓に臥す

［同巻十三「卯飲醉臥、枕上有賦」］

衰翁卯飲易上面　衰翁卯飲し　面に上り易く
澤国春寒偏著人　沢国春寒く　偏へに人に著く
下榻一盃還就枕　榻より下りて一盃し　還た枕に就く
不嫌鼾睡聒比隣　鼾睡の比隣に聒しきを嫌はず

［同巻八十「晨起復睡」］

などがあるが、朝酒を飲んでまたねむりこける様子が詠まれており、まさに閑の境地である。このように卯酒は閑の境遇とともにややおどけた詩として詠み継がれている。しかし、白楽天と陸游とでは卯酒の飲み方や閑の捉らえ方にはかなりの相違があったに違いない。官途にも恵まれ、進んで激職を避け、「居易」「楽天」を求めた白の卯酒は美味く、不遇の時代が長かった陸の卯酒は時に苦かったのではないか。このほか、元以後の例も見られるが略す。

三

次に、白詩の卯酒の詩がわが平安文学に受容されていく諸相を考察する。卯酒が現れる最初の作品は次の例であろう。

飲酒卯前及百鍾　酒を卯前に飲みて　百鍾に及び
黄昏主客醉相従　黄昏には　主客醉ひて相従ふ

［『田氏家集』巻下「毒醉吟、呈二座客一」］

本詩は諸客に呈した「毒醉吟」という戯れの詩である。卯の時からたそがれどきまで痛飲したということを面白おかしく述べており、内容的には白詩の卯酒とは異なるが、白詩を読んで得た新知識をひけらかし、座客に呈するという趣の詩であろう。島田忠臣の「いちはやきみやび」と言えようか。[注2]

次の例としては、

野酌卯時桑葉露　野酌は卯時の桑葉の露
山畦甲日稲花風　山畦は甲日の稲花の風

［『和漢朗詠集』巻下　紀斉名「田家」］[注3]

がある。この例は白詩の卯酒を学んだ確かな例であろうが白詩の世界とは著しく異なる。白詩が悠々自適の閑適を満ち足りた気持ちで歌い上げるのに対して、この詩では「田家」という主題の下に田園風景の一つ朝酒を野で飲むというだけの詩になっている。複雑多難な人生経

験の末にたどり着いた白楽天の処世訓であろうが、白詩が謳歌する卯酒による閑適の世界の喜びの理解、共感というものはほとんど皆無と言えよう。白詩の持つ閑適の世界が「田家」という詩の中で用いられたことがわずかながらも白詩の雰囲気をくみ取ったと言えようか。

なお、この詩句を基にして『為忠家初度百首』（雑部「野酌」）には

風そよぐ秋の野たちて朝な朝なくみこそつくせ桑の葉の露

などの和歌が詠まれている（川村晃生氏「酒の詩・酒の歌」『平安文学論究』第九輯）。

このほか『本朝無題詩』にも数例見える。

卯時要飲江村霧　卯時飲を要す　江村の霧に
亥日成群沙岸風　亥日群を成す　沙岸の風に

［「賦漁夫」巻二　藤原周光（本間洋一氏『本朝無題詩全注釈』新典社による。一部訓みは変えた。）］

この詩も詠物詩として、早朝から漁に出かける漁夫が暖を取るための卯酒を必要とするというだけの内容で白詩の世界とは次元を異にする。

閑居冬日思悠哉　閑居の冬日　思ひ悠なる哉
談話爐辺興自来　爐辺に談話すれば　興自らに来たる
畳樹暁声嵐烈々　畳樹の暁声は　嵐烈々たり
高巌暁色雪皚々　高巌の暁色は　雪皚々たり
卯時霞暖樽中桂　卯時の霞は暖かなり樽中の桂
子月花寒砌下梅　子月の花は寒し　砌下の梅
（十句中略）
微功久積孫康牖　微功　久しく孫康が牖に積めど
片善未逢郭隗台　片善　未だ郭隗が台に逢はざりき
燈燭恩光過古稔　燈燭の恩光は　古稔に過ぎ

徒焦胸臆滅心灰　徒らに胸臆を焦がし滅せる心灰のごとくなりぬらん

［巻五「爐辺閑談」藤原明衡］

「閑居冬日」「談話爐辺」などは白詩の卯酒の自適の世界に通じるものがあり、卯酒により暖を取り友と語らうというのも白詩の雰囲気に近い。しかし、詩の方向としては「微功久積孫康牖、片善未逢郭隗台、燈燭恩光過古稔、徒焦胸臆滅心灰」と閑談しながらもわが身の不遇沈淪を嘆くことで締めくくっており、白詩語を取り入れつつも詠まれる心情は異なる。

城南別墅隔囂喧　城南の別墅　囂喧を隔つ
景物満林也満園　景物林に満ち　也園に満つ
籬竹蕭疎煙葉透　籬竹蕭疎として　煙葉透き
庭蕪莽蒼露華繁　庭蕪莽蒼として　露華繁し
午時薬餌携茶竈　午時の薬餌は　茶竈に携へ
卯刻芳醪酌桂罇　卯刻の芳醪は　桂罇に酌む
（中略）
緋衫位浅窮秋涙　緋衫の位は浅し　窮秋の涙
素髪齢傾薄暮魂　素髪の齢は傾く　薄暮の魂
元自安閑雖適性　元自り　安閑は性に適ふと雖も
須帰帝里仰皇恩　須く帝里に帰りて　皇恩を仰べし

［巻六「暮秋域南別業即事」藤原明衡］

この詩も藤原明衡の作である。城南の山水に恵まれた閑静な別荘で「午後の茶」「卯酒」を楽しむという点では白詩に近く、先に挙げたように白詩にも卯酒と午茶の対があり、白詩を学んだことは明らかであろう。本詩も結末では「緋衫位浅窮秋涙　素髪齢傾薄暮魂　元自安閑雖適性　須帰帝里仰皇恩」と述べるように、身は性にかなって安閑と別荘に居ながらも本心はやはり都の帝恩をこうむりたいことを切々と訴

えており、官途に対する強い執着がうかがわれる。藤原明衡ら平安漢詩人は詩語の面では白詩から多くを学びながらも、白詩の「居易」「楽天」という自足した境地を自己の詩に詠むことはついに無かったようである。というよりは詠むことができなかったというのが正確かも知れない。白楽天は寒門の出身であったが、当時の社会情勢にも助けられながら概ね順調な立身出世を遂げ、本人も自らの官途や人生に満足しているのに対して、平安の文人らは身分の固定化した摂関体制下の閉塞した状況の中で身の不遇沈淪を嘆くという構図を示しており、両者の置かれた社会状況の相違や詩人官人として送った人生の幸不幸が詩の内容にも反映していると言えよう。

この他、

天永二年、一一月二五日　対レ雪唯斟酌　散位宗光

卯飲先催朝冴処　卯飲は先づ催す　朝の冴えし処

酣歌漸唱暮消程　酣歌は漸く唱ふ　暮の消えし程

［『中右記紙背漢詩集』巻七］

などの例が存する。暖を取るための卯飲ということでは白詩の趣を取り入れてはいるが、題詠の作であり先に述べたような白詩の世界とは相違する。

冒頭に挙げた『和漢兼作集』（田家・藤原有家）の

卯飲囿中桑葉露　西収郭外稲花雲

は先の『和漢朗詠集』の紀斉名の換骨奪胎したような表現であり、このころの漢詩文創作のレベルの低下が垣間見られる。

前掲青木正児氏も触れられているが和文にも

この殿には、後夜に召す卯酒の御肴には、ただいま殺したる雉をぞまゐらせける。持てまゐりあふべきならねば、宵よりぞまうけておかれける。

（『大鏡』兼通伝）

とある。ただし、「後夜に召す」ということから深夜の酒、寝酒のことで白詩の卯酒とは異なる。和文にもこのように用いられており、白詩の卯酒詩の心情に対する正確な理解は無いにしても言葉の上での面白さから広く平安人にも知られていたのであろう。

結び

白楽天が好んだ卯酒は閑適の心情とともに詠まれ、自己の心の安らぎを謳うものであった。白楽天に心を寄せた蘇東坡も白詩にならうかのようにしばしば卯酒を詩に詠んでいる。

白楽天への崇拝あつき平安人も嗅覚鋭く白詩の特徴の一つとして卯酒詩を嗅ぎ出し、自己の作品の中に取り入れている。白詩では閑適の喜びを表す一つの素材であることが多く、その楽しみ、喜びを微に入り細に入り叙述するものであった。それに対して平安漢詩では詩のテーマは別にあり、卯酒は詩語のレベルでの摂取に止まっており、白詩の心情を理解し、それにならおうとする作は見当たらない。白楽天と平安文人の置かれた社会的状況、官途の相違もあったであろうし、自分の言葉で自由に詩句を操れる者と外国語である漢語を用い、しかも複雑な漢詩の規則に縛られる平安文人にとっては白詩のような自由で赤裸々な心情の吐露は困難であるという事情もあったであろう。

このような種々の理由もあって平安文人は白詩語を取り入れつつもそれとは別の平安漢詩独自の世界を作り上げていったのである。

注

注1　彼の字の東坡も白詩中から取っており、蘇東坡が白楽天を慕ったことはこのほかの詩にも見える。「軾以去歳春夏侍立邇英。而秋冬之交、子由相継入侍。次韻絶句四首、各述所懐」（其四）」（『蘇東坡詩集』巻二八）の詩では「定似香山老居士、世縁終淺道根深」と詠み、「樂天自江州司馬除忠州刺使。旋以主客郎中知制誥、遂拝中書舎人。軾雖不敢自比、然謫居黄州。起知文登、召為儀曹、遂忝侍従。出處老少、大略相似。庶幾復亨此翁晩節閑適之樂焉」と自注する。また「贈李道士」（同　巻二九）にも「他時要指集賢人、知是香山老居士」と詠み、「樂天為翰林學士。奉詔寫眞集賢院」と自注する。また詩語の面でも白詩によく見える語をしばしば用いている。

注2　小島憲之監修『田氏家集注』はこの卯刻からの詩について白詩の用例をあげて「卯の時は役所の仕事の始まる時刻で、その時に飲酒するのは反俗・隠逸のふるまい」（村田正博氏担当）と注されているのは白詩の特徴を的確にとらえている。なお『田氏家集全釈』（中村璋八・島田伸一郎著）は「卯の花の前で、多くの酒壷を空にするまで酒を飲み」と解釈されているが誤りであろう。

注3　第一五回和漢比較文学会（九六年九月。於金沢学院大学）において故川口久雄氏の「川口文庫」（石川県立図書館蔵）展観の際目に触れた『和漢朗詠集私注』（足利末期古写本、函架番号九一九三・一六）には「唐玄宗卯時、貴妃進酒謂卯酒」と注があり、このころ既に楊貴妃の故事が知

られていた。

参考文献

花房英樹氏『白居易研究』（世界思想社）
村上哲見氏『蘇州・杭州物語』（集英社）
本間洋一氏「王朝漢詩の飲酒詠管見――その語彙・故事をめぐる覚書として――」（同志社女子大学「日本語日本文学」第四号　九二・一〇）

＊本稿は第三五回和漢比較文学会例会（西部）［平成四（九二）年四月一一日。於神戸大学］における口頭発表に基づくものである。席上多くの方より質問を受けた。心より御礼申し上げる。